

## 日本ジオパーク委員会公開プレゼンテーション開催報告

住田達哉・宮内 渉・下川浩一・利光誠一（産総研 地質標本館），濱崎聡志（産総研 地質情報研究部門）

2013年5月20日に日本ジオパーク委員会（JGC）公開プレゼンテーションが、日本地球惑星科学連合2013年大会（千葉市幕張メッセ国際会議場）のパブリックセッションとして開かれました。公開の場でのプレゼンテーションは、審査プロセスの透明化とジオパークの理念の普及のために2011年から行われており、今回で3回目となります。

2012年度において25地域ある日本のジオパーク（そのうち5地域が世界ジオパーク）ですが、今年の公開プレゼンテーションでは、日本ジオパークから世界ジオパークへの申請を目指す3地域（霧島、白山手取川、アポイ岳）の他、新たに日本ジオパークの認定を目指す10地域（本部半島、佐渡、四国西予、桜島・錦江湾、おおいた豊後大野、三笠、三陸、とかち鹿追、おおいた姫島、美祢）の合計13地域によって行われ、現地審査を経ての審査結果次第では、大幅に認定地域が増える可能性があります。今回は、発表会場を最も広い国際会議室（300人収容）に移し、9時から15時40分（途中お昼休みが1時間半）に及ぶ長丁場の公開プレゼンテーションとなりました。

昨年までは200人収容の会場でしたが、発表者によっては当日に初めて会場の広さを知り驚き、緊張してしまい本領発揮とらなかった方々がおられました。そこで今回は、会場の広さについて事前に発表者に伝えておくことで、十分な準備を行っていただきました。また、昨年まではプレゼンテーションで動画を用いることによる発表中のトラブルが散見されたため、発表で用いるパソコンのスペッ

クをあらかじめ伝えておくなどして、トラブルの未然防止に役立てていただきました。他にもパワーポイントファイルの受け渡しの段取りをあらかじめ取り決めておくなど、JGC事務局としても当日の進行をスムーズに進めるための事前準備を整えてプレゼンテーションに臨みました。

さて、当日の発表の様子ですが、会場はほぼ満員御礼でした（写真1）。世界を目指す3地域には発表と質疑応答それぞれで12分ずつが、日本ジオパークを目指す10地域には同10分ずつが、与えられた持ち時間です。日本ジオパークネットワークによる特設ホームページ（<http://jpgu2013.geopark.jp/> 2013/7/30確認）から、全ての申請地域の発表内容を動画にてご覧になれます。事前準備で伝えておいた情報が功を奏し、全ての地域が、発表中のトラブルも無くほぼ時間通りにプレゼンテーションを行うことができ、発表地域の交代もスムーズで、成功裏に公開プレゼンテーションを行うことができました。印象的だったのは、多くの地域が、発表の雰囲気盛り上げるため、のぼりを立てたり、イメージガールを登場させたりしていたことです。また、学会発表等ではお馴染みのレーザーポインタを使用しているプレゼンテーションが少なく、どこの地域の登壇者も、しっかりと観客席を向いて、堂々としたプレゼンテーションでした。しかし、情報量の多いスライドでは、やや不親切さを感じる場面もありました。質疑応答では、委員からの鋭い指摘や今後に向けての建設的な意見などが出され、活発に議論が交わされました。どこの地域もジオパーク全体を束ねるストーリーの構築に苦労してい



写真1 プレゼンテーション中の観客席の様子。300人収容の広い発表会場でしたが、若干の立ち見と空席がある位で、ちょうど良い大きさでした。最前列は関係学協会からの代表を含む委員11名、2列目机席は関係省庁の担当者ら。写真はパノラマ合成。

るようでした。それは、定義があいまいなまま語感から意味を想像する日本人らしい特性のためか、「ジオストーリー」という言葉について、JGC委員の共通認識と申請地域の担当者の理解に溝があることも一因のようです。JGCとしても用語の意味を適切に発信する必要性を認識しました。それ以外にも、今年は申請地域の増大に伴う審査体制

の見直しなど、ジオパーク活動の持続的発展に向けての転換点として、特別な年になりそうです。公開プレゼンテーション後には、委員会会議も開催され、7～8月に13地域の現地視察を実施し、次回9月の委員会にて世界ジオパークへの推薦地域と日本ジオパークの新規認定地域が決定されることとなりました。

## 第21回GSJシンポジウム「古地震・古津波から想定する南海トラフの巨大地震」開催報告

丸山 正（産総研 活断層・地震研究センター）

2013年7月10日（水）、秋葉原コンベンションホールにおいて、第21回GSJシンポジウム「古地震・古津波から想定する南海トラフの巨大地震」が開催された。折しも、今年3月には内閣府により、「南海トラフ巨大地震の被害想定（第二次報告）」が公表され、また5月には地震調査研究推進本部により、「南海トラフの地震活動の長期評価（第二版）」が公表されたばかりである。そのようななか、南海トラフ沿いで過去に発生した地震・津波や将来の地震発生について、第一線の研究者が一堂に会し最新の成果が紹介されるということで、梅雨明け直後のうだるような暑さにも関わらず、会場は329名（招待講演者を除く産総研外部からは279名）の参加者によってほぼ満席となった（写真1）。会場を見渡すと参加者は幅広い年齢層で構成されており、南海トラフの地震について世代を越えた関心の高さを認識した。

シンポジウムでは、まず文部科学省の吉田康宏氏による上述の「南海トラフの地震活動の長期評価（第二版）」の評価方針や評価結果についての紹介があり（写真2）、続いてその評価の基礎データにもなっている南海トラフ沿いの過去の地震の時期や破壊域、津波の広がり、地殻変動の

規模などについて、地質学、地形学、地震考古学、史料地震学の幅広い見地に基づく成果が報告された。そのうち地形・地質記録から見た南海トラフの過去の巨大地震・津波については、南海トラフを東部と西部に分けて、東海地域（南海トラフ東部）は産総研の藤原 治により、南海地域（南海トラフ西部）は同じく産総研の穴倉正展より、最新の研究成果が紹介されるとともに、過去の津波規模や破壊域のより正確な復元に向けて今後取り組むべき課題についても触れられた。産総研の寒川 旭の講演では、史料がないために地震の存在が把握されていなかった歴史地震の実体や先史地震の時期や破壊域の広がりを明らかにするうえで、遺跡で見いだされた地震の痕跡が重要な手がかりになることをはじめ、南海トラフの巨大地震の歴史に関する「地震考古学」の研究成果が総括された。新潟大学の矢田俊文氏の講演では、確実な史料の解読により、宝永地震による浜名湖北部の地殻変動と大坂の被害数をきわめて詳細に把握できることが述べられた。さらに、南海トラフを震源とする将来の大地震発生の可能性やその際の規模に関する、最近提案された新たなモデルについて東京大学地震研究所の瀬野徹三氏から紹介があり、最後に産総研の安藤亮輔により、地球物理学的データ・モデルと古地震データの融合による地震発生予測手法の高度化に向けた将来展望についての紹介で締めくくられた。講演の詳しい内容は、GSJ地質ニュース2013年7月号（<http://www.gsj.jp/publications/gcn/gcn2-07.html> 2013/08/02 確認）に掲載されているので、そちらを参照されたい。

歴史資料の信頼性を正しく吟味しなければ、地殻変動や被害の分布、被害者数を著しく誤って評価する場合があることについて実例をもとに紹介された矢田氏の講演は、ふだん歴史学・史料地震学に触れる機会の少ない筆者には新鮮であった。

上記7件の講演の後、産総研活断層・地震研究センター長の岡村行信の進行のもと総合討論が行われた。会場からは、「同じ公的機関でありながら、内閣府と産総研で地震



写真1 講演に熱心に聞き入る会場を埋める参加者（以下写真はすべて活断層・地震研究センター北川有一撮影）。

のリスクについて見解が異なっている、どう受け止めればよいか?」,「過去の南海トラフの地震の破壊区間や活動様式の捉え方によって異なってくる発生間隔や将来の地震発生の可能性をどのように理解すればよいのか?」などの質問や、「東北地方太平洋沖地震では海溝付近の浅い部分が大きくすべったことにより大規模な津波が発生したことを踏まえて、横方向の連動だけでなく、深さ方向にどのように連動するのか理解することも大きな課題」などの今後の

研究に関する提案があり、終了時間まで活発な議論が行われた。

また、会場では活断層・地震研究センターの最新の研究成果が12件ポスター展示された。講演の休憩時間に設けられたポスター発表のコアタイムでは、各ポスター前で熱心な議論が行われた(写真3)。ポスター発表の要旨もGSJ地質ニュース2013年7月号に掲載されている。



写真2 文部科学省地震・防災研究課吉田康宏氏による講演。

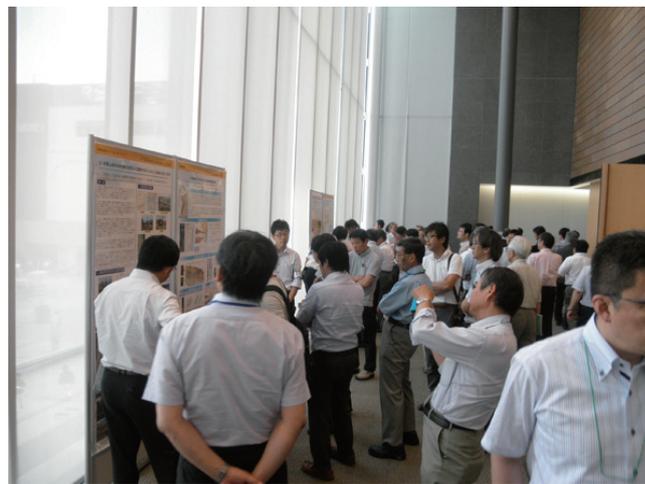


写真3 ポスター発表の風景。

## 新人紹介 ①



### 風早 竜之介 (かざはや りゅうのすけ)

地質情報研究部門 (マグマ活動研究グループ)

地質情報研究部門マグマ活動研究グループ博士型任期付研究員の風早竜之介です。研究テーマは火山ガス研究による火山活動・噴火プロセスの解明です。これまでは主として、紫外線カメラという火山噴煙中の有毒ガス(二酸化硫黄)を可視化する装置を用いて、火山活動と火山噴煙との関係について研究を行ってきました。

大学の学部までは早稲田大学の数理科学科というところで純粋数学(関数解析・収束論)を勉強していました。火山や地質については全くの門外漢でしたが、大学3年の時にイタリアのエトナ火山に登る機会があり、フィールドの面白さに触れ、地球科学を勉強してみたいと思うようになりました。大学院からは東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻へと移り、修士課程にて火山ガス観測技術の開発を行いました。博士課程からは、その観測技術を応用して火山ガス放出と火山性地震・地殻変動・噴火現象の比較を主として研究を行ってきました。



今後は、産総研において地球化学的な素養を身につけると共に、特に地球物理及び地球化学的なアプローチを結びつけた研究を進めていければと思っています。若輩者ですが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。



**内出 崇彦** (うちで たかひこ)

活断層・地震研究センター (地震発生機構研究チーム)

私は2013年4月より活断層・地震研究センター地震発生機構研究チームに配属されました。2009年3月に東京大学で博士号を取得した後、カリフォルニア大学サンディエゴ校スクリプス海洋研究所、京都大学防災研究所でポスドク研究員として研究を行ってきました。茨城県南地域が地元なので、つくばには「帰ってきた」という気持ちです。

専門は震源地震学です。これまで地震波形データの解析によって震源過程のさまざまな特徴を明らかにしてきました。独自に開発したマルチスケール断層すべりインバージョン解析法を用いて、米国パークフィールドの地震について、規模の違う地震であっても似たような成長過程をたどることを見出しました。同じ手法により、2011年東北地方太平洋沖地震の初め20秒間の破壊過程を詳らかにしました。そのほか、2010年メキシコ・バハカリフォルニア州の地震の解析にも取り組んできました。

産総研着任後は、微小地震や低周波地震の解析を通して、それらの背後にある応力状態などの解明に取り組んでいます。



そして、活断層や津波堆積物といった地質学的情報も取り入れて、地震発生の総合的理解に努めます。どうぞよろしくお願いいたします。

【スケジュール】

9月18日	第16回ヨウ素学会シンポジウム (千葉大学, 千葉市)
9月22日～9月24日	第10回アジア地熱シンポジウム (Tagaytay, Philippines)
9月23日～9月26日	EUROCK 2013 - ISRM European Regional Symposium - Rock Mechanics for Resources, Energy and Environment (Wroclaw, Poland)
9月24日	第18回日本ジオパーク委員会 (経産省別館, 東京都)
9月26日～9月27日	International symposium on sediment disasters under the influence of climate change and tectonic activity (3rd) (京都大学宇治キャンパス, 宇治市)
9月28日～9月30日	日本地理学会2013秋季学術大会 (福島大学, 福島市)
9月29日～10月1日	日本火山学会2013年度秋季大会 (猪苗代町体験交流館「学びいな」, 福島県耶麻郡猪苗代町)
10月5日	地質標本館野外観察会
10月7日～10月9日	日本地震学会2013年度秋季大会 (神奈川県民ホール, 横浜市)
10月15日	産総研本格研究ワークショップ (ホテル札幌ガーデンパレス, 札幌市)
10月15日～10月18日	日本ジオパーク隠岐大会 (隠岐ジオパーク)
10月19日～10月20日	2012年度日本水文科学学会学術大会 (千葉商科大学, 市川市)
10月19日～10月20日	第2回G-EVER国際シンポジウム (仙台市情報・産業プラザ, 仙台市)
10月20日～10月26日	第49回東・東南アジア地球科学計画調整委員会 (CCOP) 年次総会 (仙台国際センター, 仙台市)
10月29日～10月31日	日本測地学会第119回講演会 (国立極地研究所, 立川市)
10月31日～11月1日	産総研オープンラボ (産総研, つくば市)

速報!

9月9日に隠岐ジオパークが世界ジオパークに認定

韓国济州島で開催されたアジア太平洋ジオパークネットワーク会議で、隠岐ジオパークの世界ジオパークネットワーク加盟認定が発表されました。

◆ 編集後記 ◆

各地の最高気温がニュースになることの多かった、長く暑い夏がようやく終わり、少しずつ秋らしくなってきました。今月号から、今年度産総研地質分野に新たに加わった方々の自己紹介を掲載していきます。

今月号には、連載の「シームレス地質図でたどる幸田文『崩れ』」に加え、北海道沿岸域の海洋地質図の紹介、地球化学図に同位体のデータを加えてテクトニクスを読むという試み、そして地質図に親しんでもらうために開発された砂絵教材など、産総研地質分野が出版する各種地質図類に関する記事が集まりました。地中熱利用が進んでいるスイスの様子を紹介した記事は、日本での地中熱利用の普及に参考になるのではないのでしょうか。今月の「誕生石の鉱物科学」では、ブルーサファイアの発色の仕組みが解説されています。

(9月号編集担当：渡辺真人)